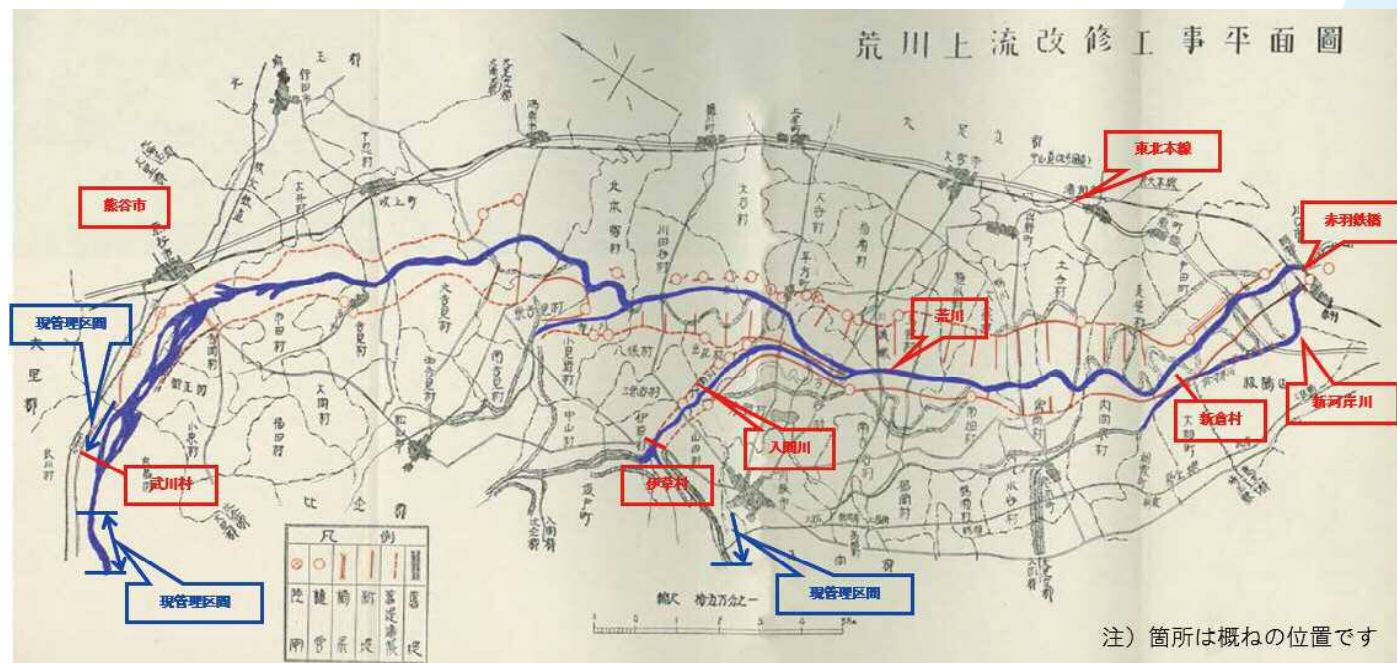


100
大正7年 1918 ~ 平成30年 2018

荒川上流部改修から
100年
1918-2018

荒川上流部改修100年って？



1918 (大正7) 年 荒川上流改修工事平面図

荒川は現在までの100年の間に人の力で姿を大きく変えてきました。

1910(明治43)年に襲った大洪水を契機に、荒川は国が改修すべき河川となり、「荒川改修計画」がたてられました。1918(大正7)年から荒川上流部改修工事が始まり、荒川本川では赤羽鉄橋(東京都北区赤羽地先)から大里郡武川村(深谷市川本地区)の区間で整備が行われました。

改修内容は蛇行していた河道の直線化、連続堤防及び横堤の整備が行われ1954(昭和29)年に一応の完成をみました。

1947(昭和22)年にはカスリーン台風による大洪水で関東全域に大きな被害が発生したことを踏まえ、1950(昭和25)年に「荒川総合開発計画」が立てられ1961(昭和36)年に二瀬ダムが完成しました。

その後も上流ダム群や荒川第一調節池と改修が続けられ、現在も河川整備計画に基づき様々な治水対策が進められています。



蒸気機関車による土運搬の様子

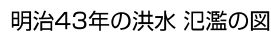


二瀬ダム

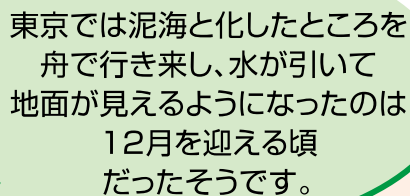
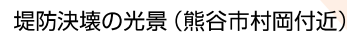


荒川第一調節池

荒川上流部 改修事業の契機となった 明治43年の洪水



堤防決壊314箇所、死傷者401名、住宅の全半壊・破損・流出18,147戸、非住宅10,547戸、農産物の損害は2400万円(現在の資産価値で約1000億円)を超えました。



下流部では1911(明治44)年に荒川放水路事業に着手(昭和5年完了)、上流部の改修は下流部の進捗をみながら1918(大正7)年に着手されました。



大正
7年
1918

昭和
29年
1954

荒川上流部 改修工事

荒川上流部改修から
100年
1918-2018

荒川上流部における現在の荒川の原型は、1918(大正7)年から始まる荒川上流部改修工事で築られました。

施工区間は、赤羽鉄橋(東京都北区赤羽地先)から大里郡武川村(深谷市川本地区)に至る62.3km、入間川筋の比企郡伊草村(現川島町)地先の落合橋から荒川合流部に至る5.9km、新河岸川筋の北足立郡新倉村(現和光市)から岩淵水門に至る11.1kmでした。

このとき行われた改修内容は、蛇行していた河道の直線化、直線化工事の掘削で生じた土砂を利用し連続した堤防の整備、遊水効果を高めるための横堤の整備、入間川等の合流部の改良が行われ、1954(昭和29)年に一応の完成をみました。



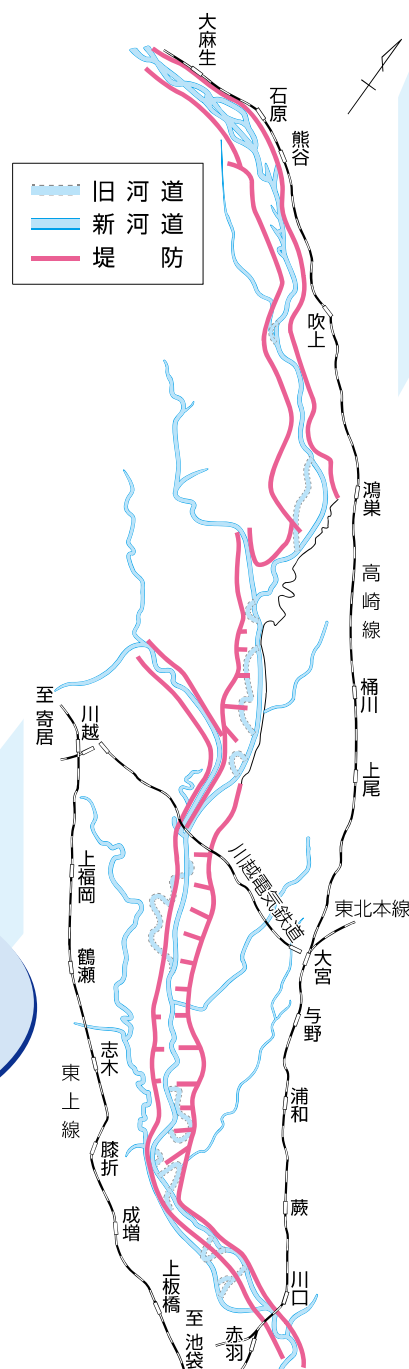
人力による施工



機械動力による施工

一方、下流部では、1911(明治44)年より岩淵から河口まで、約22kmの放水路事業を行い、1930(昭和5)年に完成しました。現在ではこの放水路が荒川になっています。

掘削や築堤等の工事では、
人力による施工の他、
蒸気を使用した機械動力による
施工も行われたんだよ。



荒川上流の改修計画(昭和2年)

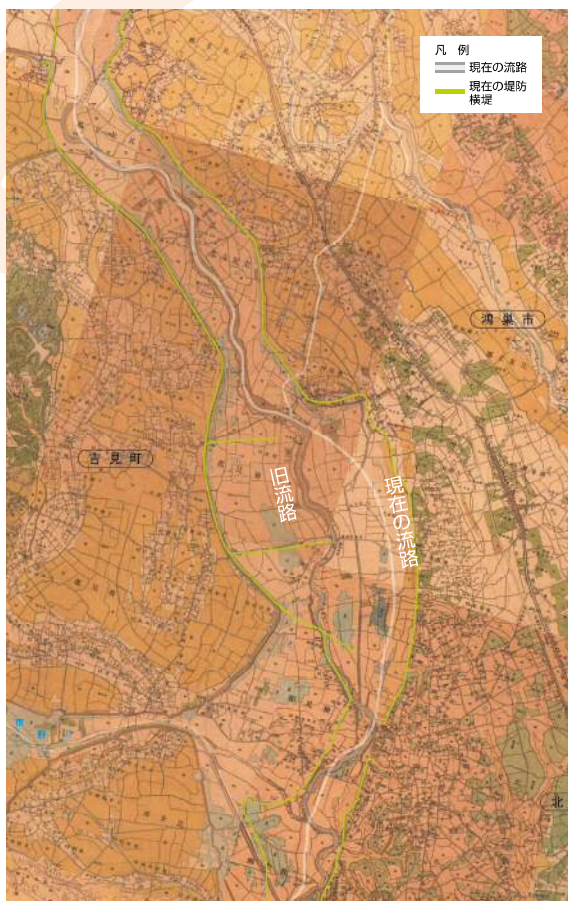


荒川放水路改修平面図

100
大正
7年
1918
昭和
29年
1954

流路の直線化と横堤の整備

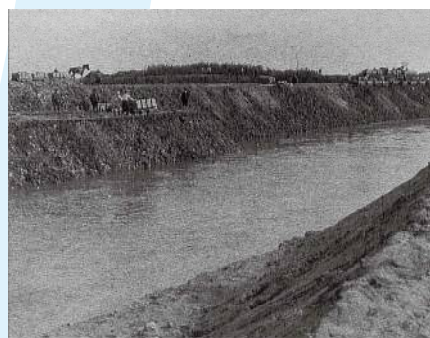
荒川上流部改修から
100年
1918-2018



旧流路と現在の流路の比較

荒川上流部では蛇行していた河道を直線化する掘削工事が行われました。河道を直線化したことにより、洪水時に水が流れやすくなりました。

掘削工事とあわせて、連続した堤防の築堤工事も行われ、掘削で生じた土砂を利用して築堤が行われました。



馬宮付近堤防建設のようす (さいたま市)

出典：馬宮西小学校



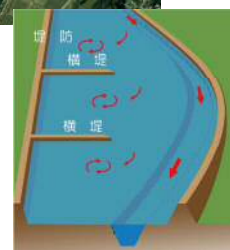
横堤で水を一時的に蓄えて
いったいどうなるの？



下流へ一気に洪水が
流れるのを
防いでいるんだよ。



平時



洪水時

横堤は、通常の堤防に対して直角につくられた堤防です。

洪水の流れを受け止め、横堤と横堤の間に水を一時的に蓄える役割を果たしています。

荒川中流部の横堤は、整備当時27箇所ありました。これらは、荒川上流部改修によって整備されたもので、広い川幅とあわせて荒川の中流部の特徴になっています。現在は25箇所(左岸14箇所、右岸11箇所)になっています。

1

昭和
6年
1931昭和
29年
1954

入間川と荒川、昔は直角に合流していた？

荒川上流部改修から
100年
1918-2018

改修前の荒川と入間川 (昭和6年以前)

改修前は現在より上流側で直角に近いような角度で入間川が荒川に合流していました。また、河川の流路も曲がりくねっており、洪水による被害も発生しやすい状況でした。



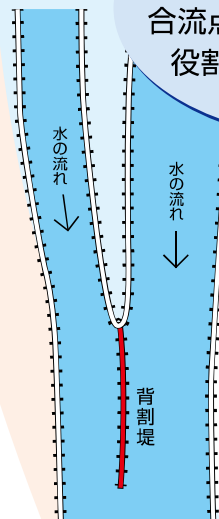
改修後の荒川と入間川 (現在)

河川の合流を緩やかにし、荒川と入間川の合流点を5km下流に引下げて、2つの川の間約4kmにわたり背割堤を設けました。

2つの河川を緩やかに合流させることで、合流点からの洪水の逆流を防ぐ役割を果たしているんだよ。



荒川と入間川の合流点



背割堤略図



100
昭和
17年~昭和
1942 1954
29年

荒川上流部改修から
100年
1918-2018

三川分流工事 (入間川、越辺川、小畔川)



改修前の三川 (昭和17年以前)



改修後の三川 (現在)

荒川の支川である入間川、越辺川、小畔川の三川の合流付近では昔から水害に悩まされてきました。そこで、もともと落合橋の上流で合流していた入間川、越辺川、小畔川の合流点を下流側に付け替え、緩やかに合流するように分流工事を行いました。

これにより、入間川と越辺川の合流点が約2km下流に、越辺川と小畔川の合流点が約1km下流になり、三川がはっきりと分離し洪水がスムーズに流れるようになりました。



三川合流地点

三川分流工事实現には
坂戸市出身の原次郎氏らの
尽力がありました。



原次郎先生治水彰功碑



大正
7年
1918

昭和
29年
1954

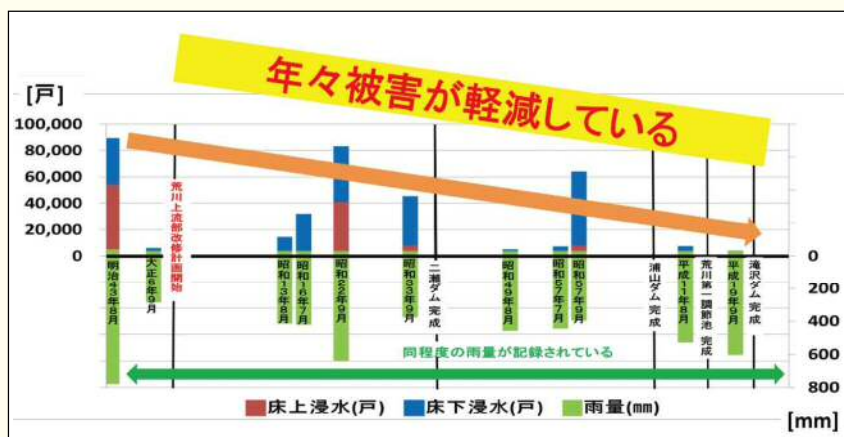
上流部改修 工事事業の効果

荒川上流部改修から
100年
1918-2018

改修前の河川で平成19年の洪水が発生したら

荒川上流部改修着工より100年、堤防改築や横堤新築、ダム・遊水池整備等の様々な事業を行ってきました。その結果、以前と同程度の雨量が記録されても、年々被害の規模が小さくなっていることがわかります。(図1)

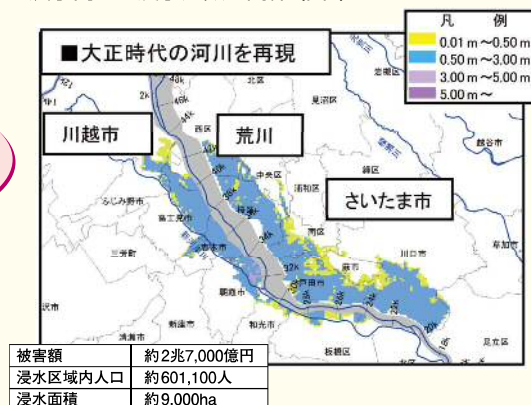
河川改修の効果により、実際には大規模な氾濫被害はありませんでしたが、大正時代の河川を再現し、平成19年洪水を流した際の氾濫解析を行った結果(図2)、さいたま市や川越市で氾濫被害が起こる結果となりました。



埼玉県部における洪水雨量と浸水戸数の関係(図1)



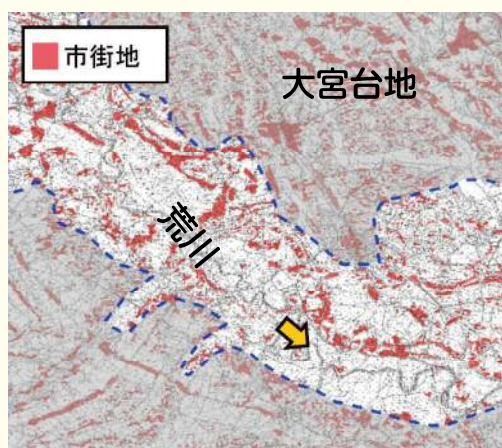
100年間に実施されてきた改修により、浸水被害が大きく減少しているのね。



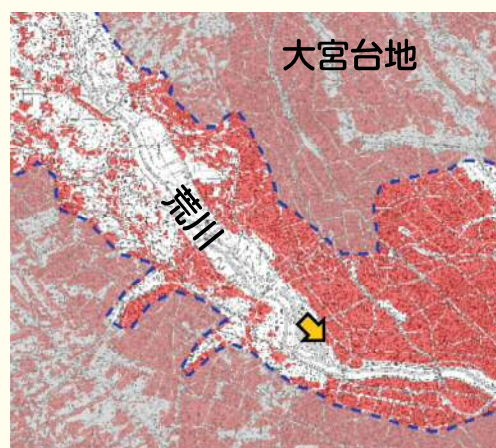
H19洪水を流した時の氾濫解析(図2)

荒川低地による市街化の進展

さいたま市、戸田市、和光市、朝霞市、志木市、板橋区付近の河川の氾濫区域内では、大正時代と比較すると市街化が進み、改修による浸水被害の減少により、人口の増加や経済発展に大きく貢献しています。



大正時代



現代

10
昭和
22年～36年
1947 1961

カスリーン台風による 大洪水、そして 二瀬ダムの建設が始まる

荒川上流部改修から
100年
1918-2018



カスリーン台風による古谷村の浸水状況（現川越市） 出典：埼玉新聞社



堤防決壊地点の様子（熊谷市久下地先）

カスリーン台風による大洪水が関東を襲う

1947（昭和22）年のカスリーン台風により発生した大洪水により、荒川のみならず関東全域に大きな被害が発生しました。

荒川本川では、熊谷市久下、鴻巣市大間の左岸2か所で決壊し、利根川の氾濫水と合わさり、濁流は東京湾まで至りました。



二瀬ダム

「洪水調節」
「かんがい用水の確保」
「発電」の事業目的を
持っています。



二瀬ダム建設

カスリーン台風による計画を上回る出水をふまえ、1950（昭和25）年に「荒川総合開発計画」が立てられ、埼玉県及び東京都の水害に備えることとなりました。

二瀬ダムは、その計画に基づき1952（昭和27）年から建設が開始され、1961（昭和36）年に完成しました。

事業の効果

二瀬ダムでは、出水時にダム下流の河川の水位低下を行っており、管理を開始した1961（昭和36）年以降55年間で45回の洪水調節実施しました。また二瀬発電所では、平成23年～平成27年の5年間で年平均約8,500 MWh発電しています。これは約2,000世帯※が1年間で使う電力量に相当します。

※家庭における年間消費電力量：4,432kWh/年・世帯

昭和
36年～1961

昭和
45年1970

荒川上流部改修から
100年
1918-2018

水が足りない 利根川の水を荒川へ



武蔵水路



下流側から見た秋ヶ瀬取水堰

武蔵水路は、1967(昭和42)年に
工事が完了しました。

東京砂漠とも呼ばれた水不足が発生

昭和30年代後半から国内は経済の高度成長期に入りました。人口の大都市への集中・大都市周辺の都市化に伴い水の需要が急激に増え、水不足が深刻になってきました。

この問題を解決するために荒川・利根川水系における水資源開発基本計画(第一次フルプラン)が1962(昭和37)年に策定され、利根川の水を荒川に導水し、東京都と埼玉県の都市用水として利用することとなりました。

利根大堰で取水した利根川の水は、武蔵水路を通り荒川へ注ぎます。送られた水は、吉見浄水場で取水され埼玉県の水として利用されています。また、さらに下流の秋ヶ瀬取水堰でも取水され、朝霞浄水場からは東京都へ、大久保浄水場からは埼玉県へ送られています。

事業の効果

武蔵水路の完成により、荒川での水道用水の取水量は飛躍的に増加し、荒川の水と利根川の水を合わせた水利権量は約44m³/sとなっています。水道用水は、そのほとんどが秋ヶ瀬取水堰地点で取水され、埼玉県民約430万人、東京都民約1,250万人、合わせて約1,680万人の飲み水として供給されています。

昭和
48年～
1973

平成
16年
2004

洪水調節・利水補給 の役割を担う 荒川第一調節池

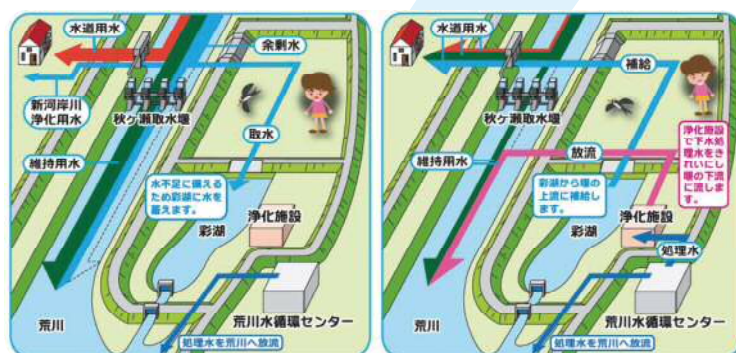
荒川上流部改修から
100年
1918-2018



平常時の荒川第一調節池

荒川第一調節池の利水機能

彩湖(荒川貯水池)に貯留されている水を秋ヶ瀬取水堰上流に補給し、東京都や埼玉県の水道用水として利用されています。



荒川の水が足りている時

荒川の水が足りない時

荒川第一調節池の概要

戸田市・さいたま市・和光市・朝霞市・志木市にまたがり、秋ヶ瀬公園と人造湖「彩湖」を含めた一帯が荒川第一調節池です。

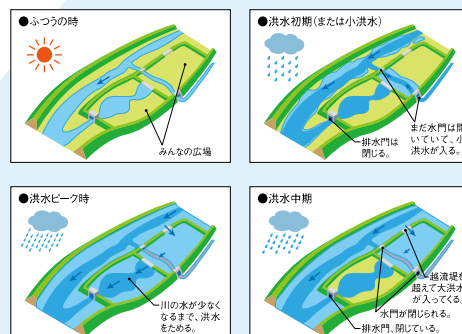
荒川第一調節池は、広大な川幅を有する荒川中流部に位置し、荒川の洪水調節や利水補給といった重要な役割を担っています。

1997(平成9)年3月に貯水池「彩湖」を完成させ、荒川第一調節池全体は2004(平成16)年3月に完成しました。

荒川第一調節池の治水機能

高水敷の一部を堤防でかこみ、受け止めた洪水を一時的にためることで、より安全に洪水を流しています。

洪水調節のようす



洪水をためる荒川第一調節池

事業の効果

1999(平成11)年の洪水発生当時、荒川第一調節池は建設中でしたが、8月14日22:00～15日10:00(約12時間)にかけて調節池内に洪水が流入し、荒川下流域の水害の軽減効果を発揮しました。また2007(平成19)年台風9号による洪水では、9月7日15:45～18:40(約3時間)にかけて越流堤から調節池内に洪水が流入。約3万m³の洪水調節を行いました。

100
昭和
48年～
1973
平成
23年
2011

有間・浦山・ 合角・滝沢、 上流ダム群の建設

荒川上流部改修から
100年
1918-2018

荒川上流ダム群の建設

1973(昭和48)年に荒川水系工事実施基本計画は、治水安全度を大幅に引き上げて改訂され、上流部にダム群が建設されることになりました。また、利水面では1974(昭和49)年に第三次フルプランが策定され、ダム群は水資源開発施設としても位置づけられました。



有間ダム 1986(昭和61)年完成



浦山ダム 1999(平成11)年完成



合角ダム
2003(平成15)年
完成



滝沢ダム
2011(平成23)年
完成

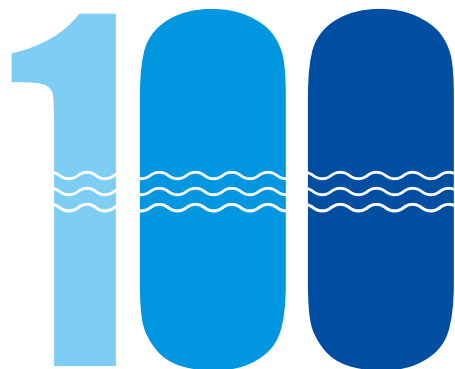


水害から荒川流域の人々とその資産守り
かんがいや用水を確保したことで
荒川下流地域の発展に
大きく貢献したといえるね。

事業の効果

4つのダムの総貯水量を合わせると、13885万 m^3 になり、これは東京ドーム約112杯※に相当します。

※東京ドームの容量を124万 m^3 として算出



河川整備基本方針・ 河川整備計画

荒川上流部改修から
100年
1918-2018

荒川の将来をどのような整備していくかなどの
基本方針・計画を定めています

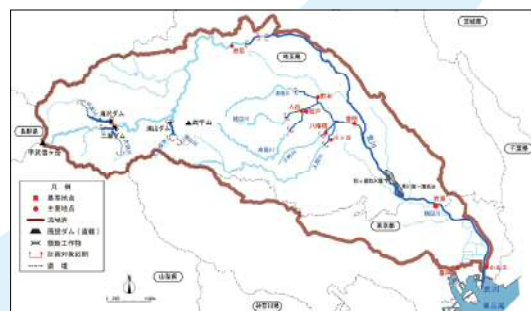
河川整備基本方針と河川整備計画について

平成9年に河川法が改正され、今までの工事实施基本計画の制度を見直し、長期的な視点に立った河川整備の基本的な方針を定める「河川整備基本方針」及び、河川整備基本方針に基づき個別事業を含む具体的な河川の整備の内容を明らかにするとともに地域の意向を反映した「河川整備計画」を策定しました。

荒川では、2007(平成19)年3月に策定された「荒川水系河川整備基本方針」に基づき、2016(平成28)年3月に整備目標の期間を概ね30年間とした「荒川水系河川整備計画」が策定されました。

荒川水系河川整備計画の内容

荒川は首都圏を貫流し治水・利水上の重要性が極めて高いだけでなく、治水・利水・環境・防災といった機能が密接に影響しあっています。そのため河川整備に当たり、これらの多面的な機能を横断的に連携して発揮させ、治水・利水・環境それぞれの目標が調和されながら達成されるような効果的な施策を検討し、総合的な視点で整備を実施します。



河川整備計画対象区間

洪水、津波、高潮等による災害の発生防止又は軽減に関する目標

戦後最大洪水である昭和22年9月洪水(カスリーン台風)と同規模の洪水が発生しても災害の発生を防ぎます。

危機管理型ハード対策とソフト対策を一体的・計画的に推進していき、被害をできる限り軽減できるよう努めます。

現在の堤防

高さが低く、幅も小さい堤防です。

堤防の強化

堤防の高さを上げて、幅も広い大きな堤防にします。



堤防の強化(ハード対策)

河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関する目標

寄居地点でかんがい期は概ね23m³/s、非かんがい期は概ね9m³/s、秋ヶ瀬取水堰下流地点では年間を通して概ね5m³/sを流水の正常な機能を維持するため必要な流量とし、これらの流量を安定的に確保します。

下流側から見た
秋ヶ瀬取水堰



河川環境の整備と保全に関する目標

治水、利水及び流域の自然環境、社会環境との調和を図りながら、河川空間における自然環境の保全と秩序ある利用の促進を目指します。



整備前



整備後

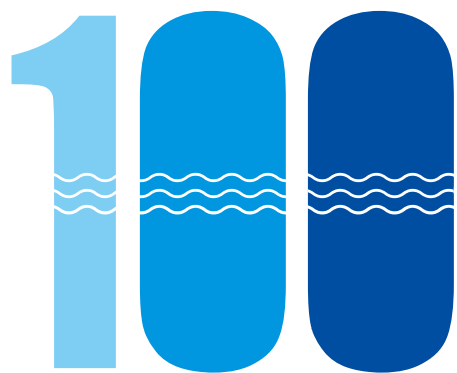
荒川ビオトープ(川島町)

その他河川整備を総合的に行うために留意すべき事項

- ・流域全体を視野に入れた総合的な河川管理
- ・地域住民、関係機関との連携・協働
- ・ダムを活かした水源地域の活性化
- ・治水技術の伝承の取組

治水技術の伝承の
取組(月の輪工法)





次の100年へ、 荒川の改修は つづいていく

荒川上流部改修から
100年
1918-2018

流域全体の治水安全度の向上を図るために



さいたま築堤左岸 (39.2k)

さいたま築堤

現在、荒川本川の堤防は羽根倉橋付近より下流は概ね完成堤となっていますが、羽根倉橋より上流の堤防は堤防の幅、高さが不足している状態です。

当地区が破堤した場合、さいたま市等の主要都市において、甚大な被害をもたらす恐れがあるため、堤防の幅、高さを確保するための工事等を実施しています。

河川環境の整備と保全

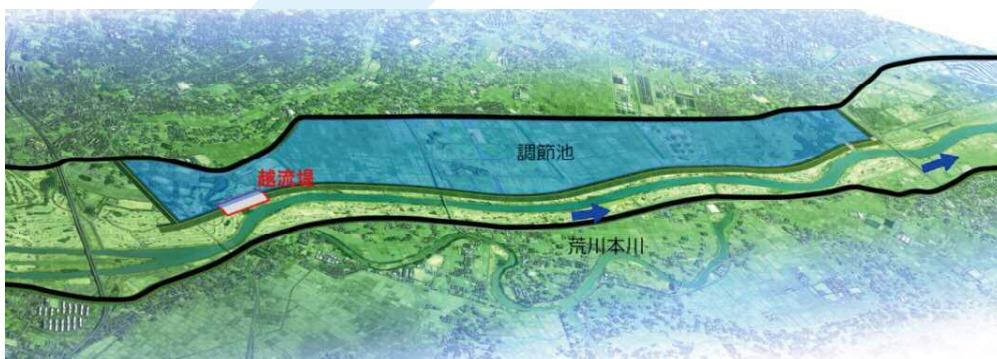


荒川太郎右衛門地区自然再生

荒川太郎右衛門地区自然再生

荒川太郎右衛門地区(荒川右岸50～54km付近)において多様な生物が生育・生息・繁殖できる良好な自然環境を再生することを目的とし、学識者やNPO、地域住民、関係行政機関と話し合いながら自然再生事業を実施しています。

洪水調節容量の確保



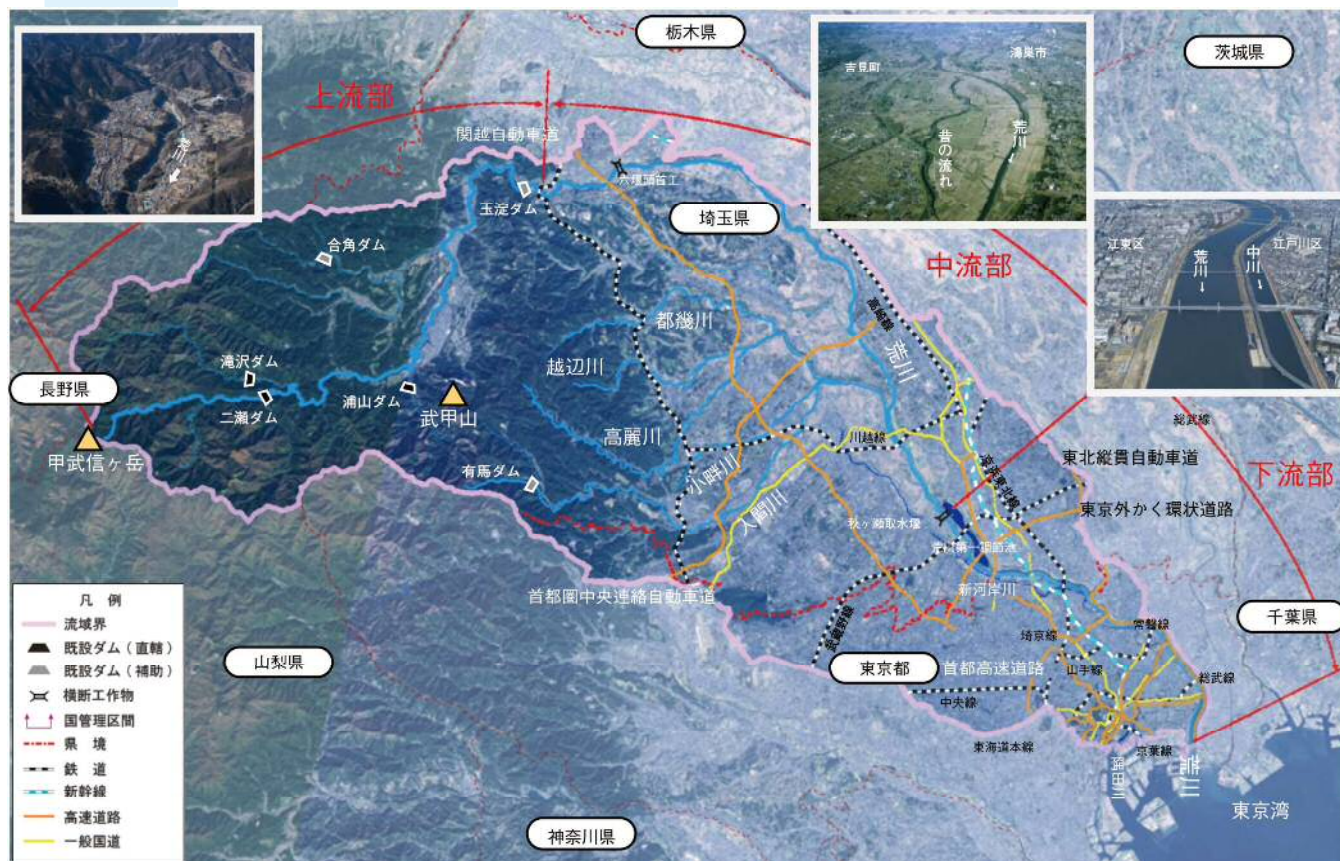
新たな調節池のイメージ図

荒川第二、第三、第四調節池

中流部では、広大な高水敷に横堤が築造され遊水機能を有していますが、より効果的にピーク流量を低減させ、下流への負荷を軽減するため、詳細な調査及び検討を行いつつ関係機関と調整の上、荒川第二調節池、荒川第三調節池及び荒川第四調節池の調節池群の整備を行います。

荒川ってどんな川？

日本の政治・経済の中核を支える重要な河川です



荒川はこんな川

荒川は、埼玉県秩父山地の甲武信ヶ岳を源とし、秩父盆地を北へ流れ、長瀬渓谷を通った後、埼玉県大里郡寄居町で南東に流れる向きを変え関東平野に入ります。

途中、市野川、入間川など多くの支川と合流しながら埼玉県中央部の平野を流下し、東京都区部と埼玉県の低地を流れ、東京都北区志茂で新河岸川に荒川が一部分かれ隅田川として、東京湾に注ぎます。中流部は日本一の川幅を有し、新岩淵水門下流が人工の放水路であることは大きな特徴です。

流域内の人口は、約976万人と多く、荒川は、日本の政治・経済の中核を支える重要な河川です。



「荒ぶる川」が名前の由来

「母なる川」である荒川は、大雨のあとなどには、洪水となり、かつてはそのたびに災害をもたらしてきました。そのようすを、むかしの人が「荒ぶる(あばれている)川」といったことから、荒川という名前と呼ばれるようになったと言われています。



数字で見る荒川

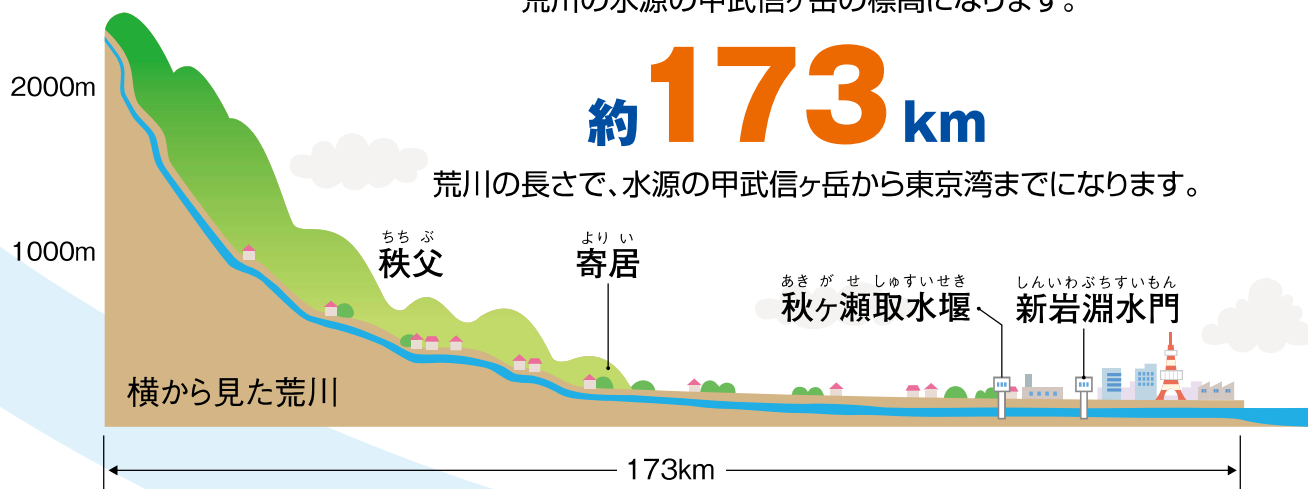
荒川上流部改修から
100年
1918-2018

荒川にはいろいろな数字があります

こぶしがたけ
甲武信ヶ岳
(2,475m)

約 **2,475** m

荒川の水源の甲武信ヶ岳の標高になります。

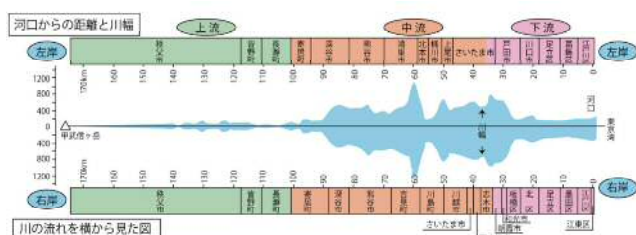


約 **173** km

荒川の長さで、水源の甲武信ヶ岳から東京湾までになります。

約 **2,537** m

荒川の川幅は日本一広く、中流の鴻巣市と吉見町の間で、河口から約62kmに位置しています。

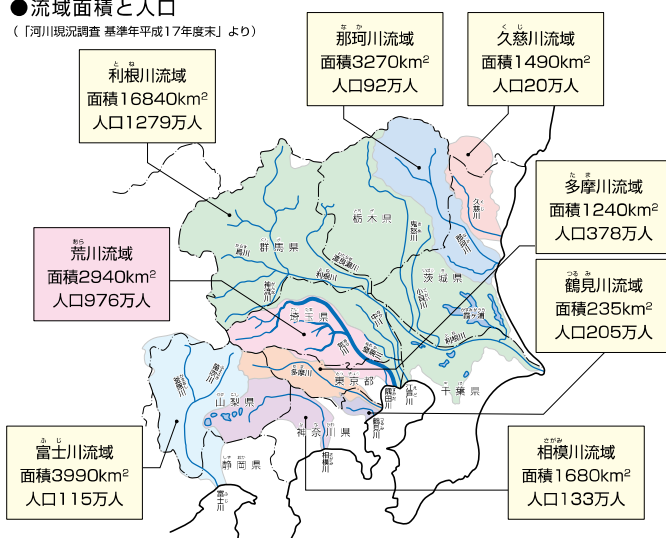


約 **3,300** 人/km²

荒川は、流域内人口が大きく、人口密度は非常に高いです。

●流域面積と人口

(「河川現況調査 基準年平成17年度末」より)



約 **2,535** 万人

平成26年度の荒川の河川空間利用者数です。

出典：河川水辺の国勢調査「河川空間利用実態調査」

約 **120** 兆円

荒川流域であらかじめ計画した規模の雨が降り、洪水が発生し、その洪水により万が一堤防が破れた場合の水につかってしまう浸水想定被害額です。

出典：平成28年度 荒川直轄河川改修事業評価

約 **976** 万人

荒川流域で暮らす人たちの人数は約976万人です。

出典：統計調査結果「一級河川における流域等の面積、総人口、一般資産額等について（流域）」
(調査基準年：平成17年)

荒川の近年の洪水

荒川流域では、たびたび洪水に見舞われています

1999(平成11)年の洪水

動きの遅い雨雲が関東地方を覆い、荒川流域では8月13日夜から14日夜にかけて断続的な豪雨に見舞われました。三峰雨量観測所では総雨量497mmを記録し、熊谷水位観測所、治水橋水位観測所では観測開始以来、過去最高となる水位を観測しました。この洪水により、荒川流域では床下浸水1,741戸、床上浸水622戸、全半壊・流失2戸の被害が発生しました。

この洪水ではこれまでの治水施設の効果がみられる一方、堤防未整備地区で浸水被害が発生しました。



京成押上線橋梁に迫る洪水



1999(平成11)年8月の洪水の様子(さいたま市)

この洪水で、2365戸の浸水被害が発生したんだって。



2007(平成19)年の洪水

台風9号により、荒川流域では9月5日から7日にかけて大雨となり、5日の降り始めからの雨量は、三峰雨量観測所にて総雨量573mmを記録しました。また、荒川の熊谷水位観測所では、平成11年の洪水の最高水位を越え観測開始以来の最高水位を記録したほか、都幾川の野本水位観測所、高麗川の坂戸水位観測所でも、氾濫危険水位(危険水位)を越えました。



2007(平成19)年9月の御成橋付近(洪水時)

明治

- 1879年(明治12) 荒川が埼玉県管理となる
- 1896年(明治29) 旧河川法制定荒川の管理が国に移管される
- 1910年(明治43) 明治43年大洪水
- 1911年(明治44) 荒川改修計画を策定
荒川放水路工事着手

大正

- 1917年(大正6) 大正6年9月洪水
- 1918年(大正7) 荒川上流部改修計画に着手
- 1924年(大正13) 岩淵水門完成



武蔵水路

- 1930年(昭和5) 荒川放水路完成
- 1938年(昭和13) 昭和13年8月洪水
- 1941年(昭和16) 入間川付替え工事完成
昭和16年7月洪水、入間川で決壊
- 1943年(昭和18) 入間川、越辺川、小畔川が直轄工事区間となる
- 1947年(昭和22) カスリーン台風、荒川二箇所で決壊
- 1952年(昭和27) 都畿川、高麗川が直轄工事区間となる
- 1953年(昭和28) 荒川総合開発計画まとまる
- 1954年(昭和29) 荒川上流部改修工事完工
入間川、越辺川、小畔川の合流部改修完工
- 1958年(昭和33) 狩野川台風が発生
- 1961年(昭和36) 二瀬ダム完成
- 1962年(昭和37) 荒川・利根川水系における水資源開発基本計画
(第一次フルプラン)が策定される
- 1964年(昭和39) 東京異常渇水、水不足深刻化(東京砂漠)
秋ヶ瀬取水堰及び朝霞水路通水、
武蔵水路通水 河川法制定
- 1965年(昭和40) 荒川水系工事実施基本計画策定
荒川が一級河川に指定、秋ヶ瀬取水堰、朝霞水路完成
- 1973年(昭和48) 通殿川排水機場完成
荒川水系工事実施計画改訂
- 1974年(昭和49) 昭和49年8月洪水
荒川水系が水資源開発促進法により水系指定を受け、第三次フルプランが策定される
- 1979年(昭和54) 総合治水対策特定河川事業の指定河川に新河岸川が指定される
- 1981年(昭和56) 川島排水機場完成
- 1982年(昭和57) 昭和57年9月洪水
- 1987年(昭和62) 首都圏大渇水(取水制限)、瀬切れ

明治43年の洪水、荒川上流部改修工事(大正7年～昭和29年)

入間川と荒川、昔は直角に合流していた?(昭和6年～昭和29年)

三川分流工事(昭和17年～昭和29年)

カスリーン台風による大洪水、そして二瀬ダムの建設が始まる(昭和22年～昭和36年)

水が足りない利根川の水を荒川へ(昭和36年～昭和45年)

洪水調節・利水補給の役割を担う荒川第二調節池(昭和48年～平成16年)

有間・浦山合角・滝沢、上流ダム群の建設(昭和48年～平成23年)



浦山ダム

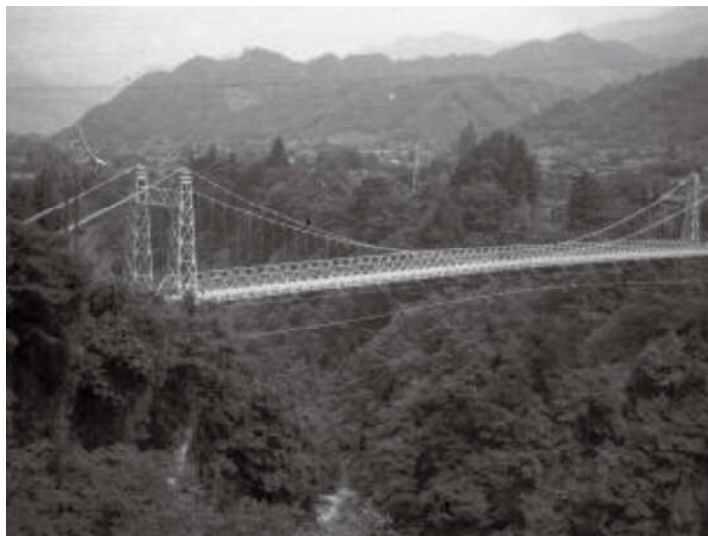
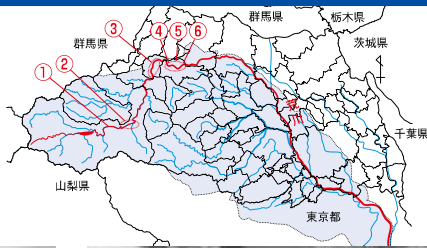
川を安全なものにするために
改修工事や治水施設の建設など
が行われてきたのね。



昭和

平成

- 1995年(平成7) 朝霞水門完成
- 1997年(平成9) 河川法一部改正
荒川調節池総合開発事業「荒川貯水池(彩湖)」完成
- 1999年(平成11) 浦山ダム完成
平成11年8月洪水 建設中の荒川第一調節池も洪水調節効果発揮
- 2003年(平成15) 合角ダム完成
- 2004年(平成16) 荒川第一調節池完成
- 2007年(平成19) 荒川水系河川整備基本方針策定
平成19年9月洪水
- 2008年(平成20) 朝霞調節池完成
- 2011年(平成23) 滝沢ダム完成



①旧白川橋

撮影地：秩父市 撮影年：昭和31年 提供者：荒川を撮る会



②秩父の荒川水系に纏わる暮らし（野菜を洗う）

撮影地：小鹿野町 撮影年：昭和49年 提供者：荒川を撮る会



③長瀬

撮影地：長瀬町 撮影年：昭和30年 提供者：矢島 一



④船水車

撮影地：寄居町 撮影年：昭和10年 提供者：荒川を撮る会



⑤冠水橋

撮影地：寄居町 撮影年：昭和10年 提供者：荒川を撮る会



⑥美しい玉淀河原

撮影地：寄居町 撮影年：昭和10年 提供者：荒川を撮る会



①六堰改築工事

撮影地：深谷市 撮影年：不明 提供者：荒川を撮る会



①六堰頭首工

撮影地：深谷市 撮影年：平成28年 提供者：荒川上流河川事務所



②旧久下橋

撮影地：熊谷市 撮影年：不明 提供者：荒川上流河川事務所



②久下橋

撮影地：熊谷市 撮影年：平成28年 提供者：荒川上流河川事務所



③旧荒川大橋

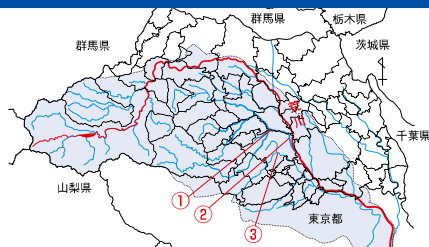
撮影地：熊谷市 撮影年：明治44年 提供者：(株) ケージーエム



③荒川大橋

撮影地：熊谷市 撮影年：平成29年 提供者：荒川上流河川事務所

平成28年に一般の方から想い出の荒川の写真を募集し、多数の応募をいただきました。その一部を掲載しています。



①落合橋

撮影地：入間川・川島町 撮影年：昭和54年 提供者：矢島 一



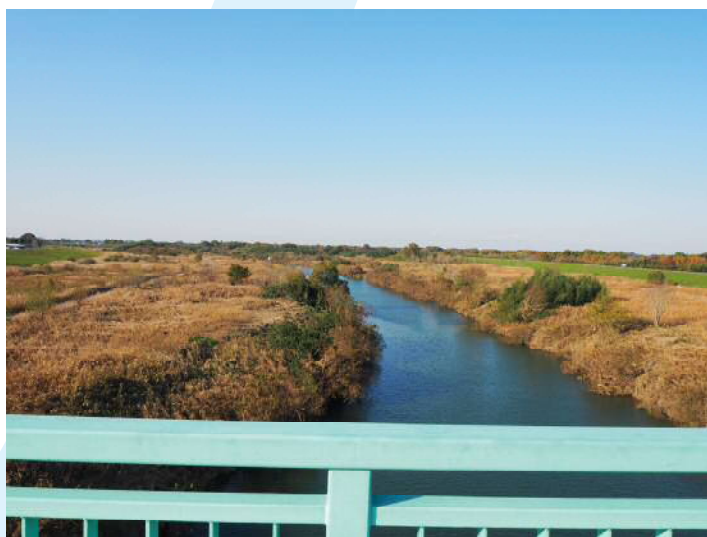
①落合橋

撮影地：入間川・川島町 撮影年：平成29年 提供者：荒川上流河川事務所



②入間大橋

撮影地：入間川・川越市 撮影年：昭和55年 提供者：新井 誠一



②入間大橋

撮影地：入間川・川越市 撮影年：平成28年 提供者：荒川上流河川事務所



③田谷堰

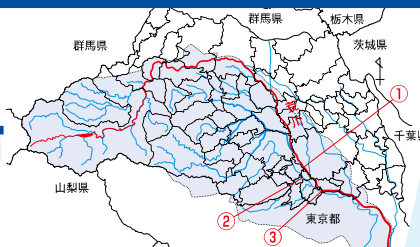
撮影地：新河岸川・川越市 撮影年：昭和59年 提供者：矢島 一



③田谷堰

撮影地：新河岸川・川越市 撮影年：平成29年 提供者：荒川上流河川事務所

荒川写真展 さいたま市～和光市



荒川上流部改修から
100年
1918-2018



①秋ヶ瀬

撮影地：さいたま市桜区 撮影年：昭和30年 提供者：矢島 一



①秋ヶ瀬取水堰（河道改修により位置が変更になっています）

撮影地：さいたま市桜区 撮影年：平成28年 提供者：荒川上流河川事務所



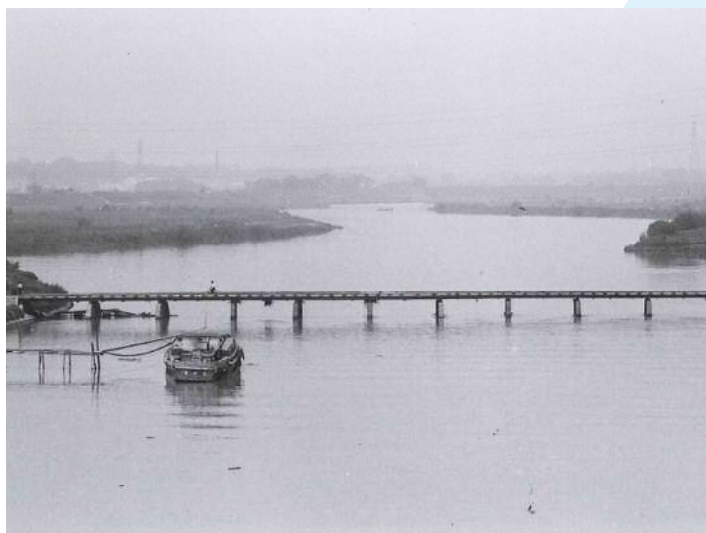
②いろは橋

撮影地：新河岸川・志木市 撮影年：昭和32年 提供者：矢島 一



②いろは橋

撮影地：新河岸川・志木市 撮影年：平成29年 提供者：荒川上流河川事務所



③笹目橋

撮影地：和光市 撮影年：昭和39年 提供者：足立 恵一



③笹目橋

撮影地：和光市 撮影年：平成16年 提供者：足立 恵一

平成28年に一般の方から想い出の荒川の写真を募集し、多数の応募をいただきました。その一部を掲載しています。